

土木学会選奨土木遺産 民間による大規模干拓事業

ひのえがわ

丙川三連樋門

岡山県岡山市
南区

岡山平野の大部分は、かつては波穏やかな浅い海が広がり、児島（陸続き以前）との間の海域は「吉備の穴海」と呼ばれていました。平安時代の内海航路も、牛窓から穴海に入り、福泊、湊の沖合から藤戸海峡を通過して水島灘に抜けていたと考えられます。しかし、高梁川、旭川、吉井川という岡山三大河川の沖積作用により、この内海は次第に埋められていきます。

鎌倉時代になると航路も児島の南を通るコースへと変化し、さらに江戸時代初期に児島はついに陸続きとなり、吉備の穴海は東の児島湾と西の阿知瀬に分かれて干拓が急ピッチで進められ、延宝7年（1679）に完成した倉田新田、沖新田など大規模な藩営新田が開かれています。

明治に入ると、興除新田の沖に士族授産事業として一番開墾、二番開墾が行われましたが、本格的なものは明治32年（1899）の藤田組による干拓からといえます。内務省お雇い技師ムルデルによって計画された干拓工事は、湾内を8区に分け1区（高崎農区）が明治38年（1905）に、2区（大曲・都・錦農区）が大正元年（1912）に完成し、約1200haの水田が造成され藤田農場の誕生となりました。

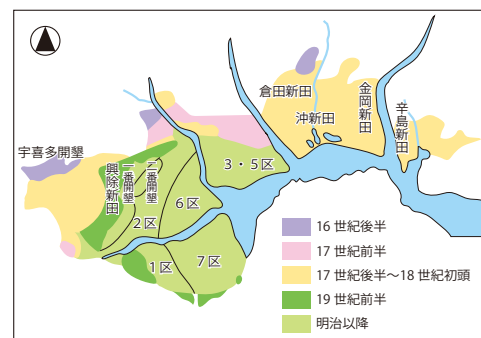
丙川三連水門は児島湾からの海水進入防止と上流の余水を確保し、さらに丙川を渡る橋梁とするために明治37年7月17日に完成しました。中央のアーチ部分の径間は12尺（約3.6m）、左右両側は径間10尺（約3m）でアーチの形状が真円ではなく楕円であることから大曲の樋門よりは後に作られたもので、設計は笠井愛次郎工学士と渡辺弁三主任技師とされています。この樋門の完成後、外側は港として活況をみせ、石炭・飲料水・海産物の荷受、米・麦の出荷のために多くの船が出入りしました。中央の樋門の要石がずれているのは、米輸送船の鶴形丸が操船ミスで衝突した跡です。樋板が木製から鉄製に、樋門の開閉が手動から電動に改修されたものの、現在も重要な樋門として使用されています。

明治以降の近代的な干拓事業により児島湾内が干拓され、わが国の先進的な機械化農業地帯としての発展を支えたのが児島湾干拓施設群ともいえます。

16世紀末の岡山平野部の推定図



児島湾干拓の変遷



干拓堤防



丙川三連樋門

明治37年（1904）に完成した赤レンガ、花崗岩造りの美しい洋風様式で、干拓2区の現役の重要な排水樋門。



桜の馬場樋門

堤防沿いに掘られた排水路（汐廻という）からの排水専用樋門。形状は楕円形の「アーチリング形式」で、イギリス積みで重ねたレンガと花崗岩を組み合わせた美しい樋門である。設計者は不明だが、建設時期は明治37年（1904）頃とみられる。